

2015 年 IWC/日本共同北太平洋鯨類目視調査の実施について

－IWC-POWER 調査航海：調査船の出港－

平成 27 年 7 月 2 日

一般財団法人 日本鯨類研究所

1. 経緯

本調査は IWC（国際捕鯨委員会）と我が国が共同で実施しているもので、IWC では通称 POWER (Pacific Ocean Whale and Ecosystem Research) と呼ばれています。この調査は 2009 年度まで南極海で行われていた成功例として世界的に高い評価を得ている IWC の調査計画 IWC/SOWER (International Whaling Commission-Southern Ocean Whale and Ecosystem Research：南大洋鯨類生態系調査、1996/97 年度～2009/2010 年度)での経験と実績を踏まえ、そのノウハウ等を活用して、IWC 科学委員会の主要研究課題に則って、2010 年度より実施されています。

昨年までの調査では、過去数十年にわたって広域的調査が実施されてこなかった北緯 40 度以北のアラスカ湾海域において、多数のナガスクジラやイワシクジラが発見され、客観的な資源評価に貢献する貴重なデータが収集されました。今回は、その第 6 回目の調査航海として、昨年までの海域のさらに南側である、北緯 30 度から同 20 度までを対象としています。商業捕鯨が一時的に停止されて以降、ほとんど調査が行われていない太平洋沖合海域において鯨類の発見がどの程度あるのかについて、世界中の鯨類研究者から注目されています。

2. 調査計画の概要

本件目視調査は、国際捕鯨委員会（IWC）と日本国政府の共同調査として IWC 科学委員会がその計画の策定を行い、同委員会内に設置された POWER 運営グループ（コンビーナ：東京海洋大学加藤秀弘教授）が計画の立案と結果の分析を主導します。また、（一財）日本鯨類研究所が水産庁から委託を受け、調査航海を実施します。本年の調査計画の概要は以下のとおりです。

2.1 主要調査目的：

- (1) 北太平洋におけるニタリクジラ、イワシクジラ、ナガスクジラ及びその他の鯨種の資源量推定
- (2) 北太平洋におけるニタリクジラ、イワシクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ及びマッコウクジラ（及びその他の鯨種）の系群構造に関する情報の収集（特にバイオプシー・サンプル採集と個体識別写真の取得）
- (3) 北太平洋セミクジラ、シロナガスクジラ等希少鯨種のバイオプシー・サンプル採取と個体識別写真の取得

2.2 調査期間：

2015年7月2日－8月30日（60日間）

2.3 調査海域：

北緯20度以北、北緯30度以南、東経170度以東-西経160度以西（公海および米国EEZ）

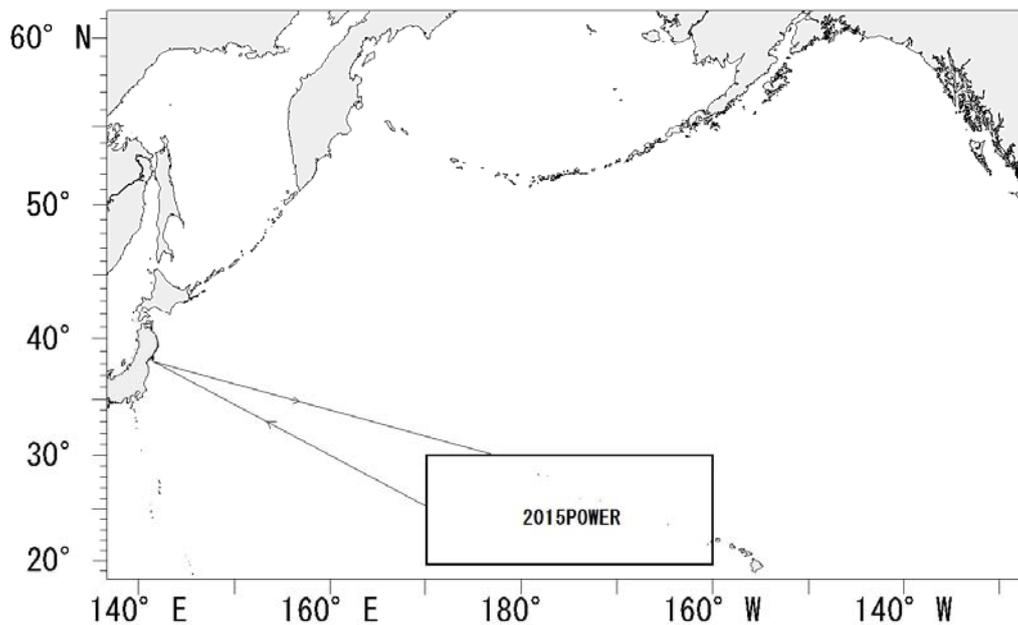


図1. 2015年の調査海域。

2.4 国際調査員：

IWC 科学委員会が指名した下記4名の国際調査員によって調査が行われます。

松岡耕二；日本・調査団長・（一財）日本鯨類研究所

Jim Gilpatrick；米国・NOAA/SWFSC

Jessica Taylor；英国・IWC 選任国際調査員

吉村 勇；日本・IWC 選任国際調査員

2.5 調査船：

第三勇新丸（742トン、（株）共同船舶所属、大越親正船長以下17名）

2.6 実施機関：

（一財）日本鯨類研究所

写真：2014年度調査の様子



イ)



ロ)



ハ)



ニ)

- イ) 出港前の集合写真(塩釜貞山埠頭にて、乗組員と IWC 調査員並びに関係者)
- ロ) ニタリクジラの背部と背びれ
- ハ) ラーセンガンによるバイオプシーサンプリング風景
- ニ) ニタリクジラの親仔